

何が社会と呼ばれていたか 明治期の用例研究

左 古 輝 人

## 何が社会と呼ばれていたか 明治期の用例研究

左 古 輝 人

### 1. 社会という語

こんにち我々が何気なく口にする社会という語は、明治初期の人々にとっては、何であるよりもまずソサイチー (society) の翻訳語だった。このことは下出集吉 ([1925-1926]1932:173-233、[1927]1932:276-281) 以来何度も確認されてきた通り (林 1966) (河村 1973:34-47) (秋元 1979:12-14) である。しかし、翻訳の必要から産まれた社会という語が、その後どのような過程を経て日本語の語彙として定着することになったのかについては、これまでほとんど関心が払われてこなかったように思われる。こんにち様々な連辞符社会論が繁栄し、雑多な社会問題が議論され、我々が社会を研究しながしかの意義ある貢献をなし得ていると思っていることなど考えあわせると、これはたいへん不自然なことである。<sup>1)</sup> 本稿は日本語語彙としての社会が明治期に辿った道筋を、読売新聞社 (1999-2000)<sup>2)</sup> に現れる諸用例に基づいて定量的に考察する。

ソサイチーの翻訳にあたった幕末・明治初期の知識人たちは、ソサイチーを、仲間、一致、公会、世間、世態など、既存の語彙およびそれらの合成によって把握しようと努めていた。しかし遅くとも明治10年代半ばには社会が、宋代中国の文献のなかにわずかに用例を見いだせるだけで、口語においても文語においてもほとんど意味を与えられていなかった事実上の造語、社会が、ソサイチーの翻訳語として定着し、以後急速に普及してゆく。

この、社会の謎について、これまでのところ最も説得力ある説明を与えたのは柳父章 (1982) だった。その説明を次のようにまとめることができる。

ソサイチーには、少なくとも2つの意味がある。第1に仲間、特に友人同士のような親しみのこもった小規模な結びつきという意味、第2に大小を問わず、個人を単位として、相互利益や防衛といった特定の目的のために形成される集合体という意味である。小規模な結びつきの意味で用いられるソサイチーならば、仲間という語によって特に問題なく翻訳できるだろう。問題は第2の用法のうち、大規模な集合体の意味で用いられるソサイチーをどう訳すかだった。

柳父は詳述していないが、この、翻訳困難なソサイチーは、より特定的には、ジョン・ロック (1689=1967) をはじめ、西欧近代の最初の局面に現れたものであろう。それは諸個人が結ぶ自発

的な約束およびその履行によって相互作用が安定している状態、それが局所的にでなく広範に実現された状態を指す理念としてイメージされ、国家統治の正当性を説明するための、また正当な統治と不当な統治を弁別するための理論的根拠として、きわめて重大な役割を担った。

Those who are united into one body, and have a common established law and judicature to appeal to, with authority to decide controversies between them, and punish offenders, are in civil society one with another. (Locke [1689]1967:342)

また19世紀には、ロックにおけるような〈諸個人から成るソサイチー〉とは相容れないかのような、代表的にはジョン・スチュアート・ミル (1858=1971) に見られるような、諸個人から成るにもかかわらず、個々人の意志に還元できない独特の拘束力を持つ何かとしてのソサイチーのイメージも現れてくる。

But reflecting persons perceived that when society is itself the tyrant --society collectively, over the separate individuals who compose it-- its means of tyrannizing are not restricted to the acts which it may do by the hands of its political functionaries. (Mill [1859]1975:44)

いずれにせよ、仲間の親密な結びつきではなく、諸個人から成る大規模な集合体としてのソサイチーが、西欧近代にとって決定的に重要な観念の1つであることには疑いの余地がなく、明治初期の翻訳者たちの多くもその重要性にはある程度気付いていたと思われる。しかし、これを指し示すために用いることができる既存の日本語語彙を見つけ出すことができなかった。そこで既存の日本語および漢語のなかではほとんどいかなる役割も果たしていなかった語、社会が選択され、定着していったと考えられる。柳父は次のように考察を締めくくっている。

このような翻訳造語『社会』には、societyとの意味のずれは、確かにほとんどない。が、共通部分もまた、ほとんどないのである。…ことばは、いったん作り出されると、意味の乏しいことばとしては扱われない。意味は、当然そこにあるはずであるがごとく扱われる。…分らないから、かえって乱用される。 (柳父 1982:22)

柳父のこの理解は恐らく、日本語語彙としての社会が持つ特徴の一側面をよく捉え得ているのだろう。しかし我々社会研究者としては、それを認めるだけで考えることを止めてよいはずがない。

これは我々の存在意義に関わる重大な問題であろうからだ。ならば、翻訳の経緯という最初の局面だけからではなく、より広く様々な用例を探索し、日本語語彙としての社会の遍歴や所在をもう一度確かめ直す必要がある。じじつ、読売新聞社 (1999-2000) の、明治7年の創刊から大正2年末までの範囲で、検索語「社会」によってヒットする2,396件の記事のうち、実際に文字列「社会」が現れる記事の全てを抽出し、整理してみると、明治期の人々による社会という語の用い方を乱用と呼ぶのは難しいことが、少なくとも明らかである。なるほど社会がソサイチーの訳語として出生しつつ、ソサイチーとあまり似ていない意味を賦与されてきたのは事実だ。しかしそれはかなりの程度に実質的な意味内容を盛られており、その変化のプロセスはかなりの程度に明確な方向性を持っていたのである。

## 2. 考察の枠組

考察を効果的に進めるために、まず次の2つの用例を、社会の辿った遍歴の始発点と終着点を示す指標として掲げ、若干の分析を施しておこう。

日本語語彙としての社会の始発点を示す好例として掲げたいのは次の記事である。

近頃の敷医社会には、不の字を冠せざるを得ざるの仁者も之れにあるやに聞き及べり。…頗る憤激に堪へざるを以て、茲に刀圭社会の諸君一般に此檄文を草し、諸君に早く斯の如き輩を其社会より放逐し、以て其社会の名誉を維持せられんことを祈るなり。…斯の如き輩は一日も医師の社会に置く可からず。之を置けば即ち刀圭社会一般の名誉を汚すの懼れある可し。…然らば都会は云ふに及ばず地方と雖も此輩を以て草根木皮の徒に代用するの道を開くべきは、活眼を備へたる刀圭社会上上流諸君の任にあらずして夫れ誰が任ずや。 [860831]<sup>3)</sup>

この記事において「刀圭社会」と呼ばれているのは、医師という職業カテゴリーに該当する「諸君一般」である。それは人々が地縁なり血縁なり約束なりを基礎とし、一定の成員によって形成される、情意的に結束した団体を指してはいない。つまり仲間ではない。しかし、かと言って「刀圭社会」は単に便宜的なカテゴリーというわけでもないのだ。この記事において、医師「諸君一般」は一定の「名誉」の基準を共有しているかのように想定されている。特に「上流諸君」はその「名誉を維持」すべく中心的な役割を担うことができるかのように期待されている。ここで医師「諸君一般」を「刀圭社会」と呼び、彼らのあいだに「名誉」の規範的価値が共有されているかのように想定し、そのなかで「上流諸君」が行使する影響力に期待しているのは、この檄文をしたためた者、

つまり「刀圭社会」には属していない記者である。

すなわち次のことである。日本語語彙としての始発点において、社会は、そこに属する内部者ではなく、そこに属さない外部者が、何らかの特殊な規範的価値を共有し、心的紐帯によって結び合っているかのように想定する、仲間ほど狭くない、職業を共にする人々の集団のイメージを指していた。

社会の用法の終着点を示す好例として掲げたいのは次の記事である。

我々の生活の根本状態に一つの矛盾がある…、即ち我々に個人的要求、社会的要求の二つがある。人は自分の本能を満足せしめる要求即ち個人要求を持つて居る。けれども我一人ではなく二人以上相集つた社会状態があるが為に、更に個人の要求と相矛盾する所の要求即ち社会要求が起つて来る、誰の心にも一面社会的要求の無い人は無い、それが無いやうに言ふのは偽りで、本心を叩けば如何に自我の強い人でも社会的要求がある。その現れ方は良心又は公共心と云ふが如き語りになつて居やうとも、自己要求の傍に社会的要求があることは熾然たる事実である。…我々の力を社会的要求の満足に徹底されても他方に圧迫された個人要求が悲しみを伴つて犠牲になる、又個人要求を徹底しても他方に圧迫された社会要求が煩悶になる。

[131117]

現代人ならば、とりわけいわゆる個人・社会問題に親しんできた社会学者ならば、この用例を違和感なく読むことができるだろう。この記事は社会を、どのような職業に従事しようとして、自分であろうと他人であろうと、とにかく「個人」(「人」、「我」、「自我」、「自己」)が「二人以上相集つた」ところ、どこにでも存在するものとして捉えている。社会の存在が明確に確認できるのは、「個人」が自分の欲求を満足させようとして、自らの「良心又は公共心」とのあいだに葛藤を生ずる場合である。だからこの記事の筆者は、「刀圭社会」を叱咤した記者とは異なり、自らを、社会的に不可能にもかかわらず、社会に完全に同化することもできない、それゆえに煩悶する「個人」の1人なのである。

社会のこれら2つの用例のあいだに介在するはずのプロセスを、次の2本の筋としてまとめることができるだろう。

特殊から一般へ。社会は始発点において、職業という高度に抽象的な人間類型をイメージの基盤としていた。この点、社会は当初から、仲間から分化していたと言える。しかしそうした諸カテゴリーを更に包括するメタ・カテゴリー、つまり現代人ならば「日本社会」と呼ぶだろうものを意味してはなかった。現代人にとってはそのような「日本社会」こそが社会と呼ぶにふさわしく感じ

られるだろうが、当時の人々はそれを指して社会とは呼んでいなかったのである。では、社会はどのような経緯を辿って、特殊なカテゴリーからメタ・カテゴリーへと一般化したのだろうか。換言すれば、「刀圭社会」に向かって檄を飛ばした記者は、いかにして刀圭社会を成分とする(日本社会)を発見するに至ったのだろうか。

外在から内在へ。始発点における社会は、そこに属さない者が、(存在するはず)という思い込みが多分に触発されて想像する規範的価値の共有、心的紐帯による結びつきを意味していた。そのような、外部者によって想定される内部としての社会は、どのようなプロセスを経て、内部者によって発見される、自分とのあいだの差異性へと転回し、しかもその差異性が苦悩として感受されることになったのだろうか。換言すれば、刀圭社会を叱咤した記者は、いかにして自ら属するところの(記者社会)を発見し、かつ自らの要求と(記者社会)の要求とのあいだに葛藤をきたすことになったのだろうか。

### 3. 《職業社会》

前節に刀圭社会なる用例を日本語語彙としての社会の始発点として掲げたのは、恣意的な選択によるのではない。芸妓社会、相撲社会、学生社会、官吏社会、教育社会、盗賊社会、芝居社会、実業社会、婦人社会、相場師社会、宗教社会など、職業およびそれに準ずるカテゴリーを指して〇〇社会と呼ぶ用例群は、明治7年の創刊以降、特に明治20年代いっぱいあいだ、他の用例に比して顕著に多く出現するのである。それ以降は漸次出現回数、頻度ともに減少してはゆくものの、それ

明治期における社会<sup>4)</sup>

	職業社会	階層社会	社会問題	社会主義	社会政策	日本社会	その他	総件数
M8~10年	1 (33.3)	1 (33.3)	0	0	0	0	1 (33.3)	3 (100)
M11~15年	8 (50.5)	5 (31.3)	0	1 (6.3)	0	0	2 (12.5)	16 (100)
M16~20年	29 (30.5)	7 (7.4)	0	9 (9.5)	0	7 (7.4)	43 (45.3)	95 (100)
M21~25年	96 (46.4)	15 (7.2)	9 (4.3)	14 (6.8)	3 (1.4)	7 (3.4)	63 (30.4)	207 (100)
M26~30年	39 (57.4)	3 (4.4)	11 (16.2)	2 (2.9)	0	1 (1.5)	12 (17.6)	68 (100)
M31~35年	24 (18.3)	8 (6.1)	7 (5.3)	15 (11.5)	5 (3.8)	6 (4.6)	66 (50.4)	131 (100)
M36~40年	34 (12.6)	7 (2.6)	9 (3.3)	131 (48.5)	15 (5.6)	2 (0.7)	72 (26.7)	270 (100)
M41~45年	18 (7.2)	15 (6.0)	10 (4.0)	87 (34.8)	28 (11.2)	17 (6.8)	75 (30.0)	250 (100)
T1~2年	4 (2.3)	7 (4.1)	12 (7.0)	23 (13.4)	10 (5.8)	4 (2.3)	112 (65.1)	172 (100)
M8~T2年	253 (20.9)	68 (5.6)	58 (4.8)	282 (23.3)	61 (5.0)	44 (3.6)	446 (36.8)	1212 (100)

カッコ内はパーセンテージ

でも完全に用いられなくなったわけではない。これは、筆者の知る限り、従来の翻訳史的な諸研究においては全く指摘されずにきた。しかし事実である。日本語語彙としての社会の始発点はこのタイプの用例にあるのだ。以下この用例類型を《職業社会》と呼ぶ。

芸妓社会の内幕を知らない馬鹿な土百姓だとますますお眼玉が出やうかとぞんじますが、何も芸妓の内幕などは知っても知らなくてもどうでも宜い。 [781102]

願ふに学問上の功績の如きは、学者社会には自づから公論もありしことなれども、世間一般は未だ之を認るもの少かりしが、此勅令〔学位令〕によりて大に此等の事に関して面目を改むるに到ることあるべし。…何れにしても今回の勅令は学問社会に取りては一大変動を生ずるの基とならんか。

[870522. [] 内引用者]

我国技芸者職工社会の有様は目下如何んと云ふに、漸く優勝劣敗の活演熾んして…劣者の学問は陳腐とか浅薄とか云はれて、以て復た人の顧みるなきに至るが如く、技芸者職工社会に於ても漸次に西洋技術の精神が流入して、…凡て商工品の生産商社会、職工仲間の競争は皆然り。 [871126]

凡そ農人社会にあれ商人社会にあれ職人社会にあれ、持た何々社会にあれ、需要と供給の平均を保つ能はざれば其弊の極は決裂して…「ストライキ」の虞は職人農人商人社会のみならず、更に甚だ大なる処に起らんことを心配す。 [880420]

相撲社会の二本柱とも云ふべき高砂、雷の両部屋より、一昨日同じ年寄の稲川へ金八十円と反物数反宛を贈りたるが、何の訳で贈ったか他の者には一向訳が分らぬと云ふ。 [890524]

盗賊社会にも亦党派あり 中国地方を蹂躪する盗賊はおもに二党派の下に属し居る趣にて、其一は丸一組といひ他の一は善組と称し、各首領ともいふべきものあり。数千の子分を養ひ…陰見出役鬼神の運動をなし居れるよし。 [900417]

学生社会の流行語は常に変遷して行くが、『馬力』が『犇猛』に、犇猛が『猛烈』になった。二人以上集まつたら屹度此の語が出てくる。…『彼奴此頃猛烈に勉強している』などと猛烈にやつている。

[090903]

これら《職業社会》の用例はいずれも、既に指摘した特殊性と外在性という2つの特徴を備えている。

特殊性について。様々な《職業社会》を列挙することこそある[871126][881104]ものの、いずれの用例においても、それら様々な《職業社会》を成分とする全体を指して社会と呼ぶ傾向は著しく弱い。全体に該当しそうなものが「我国」[871126]として表現されていることがあるのは確かだ。しかしいずれにせよ、例えば〈我国社会〉などと呼ばれているわけではない。単に「我国」と呼ば

れているだけであり、《職業社会》とのあいだの関係も描写されはしない。

《職業社会》の内部に複数の「仲間」或いは「党派」が存在するとの表現[890524][900417]、及びそれらが「優勝劣敗」の「競争」を繰り広げているとの表現[871126]は、社会と仲間とのあいだの関係を特定していると言える。「盗賊社会にも亦党派あり」[900417]と言われているということは、他の様々な《職業社会》にも同様のことが想定されているのだろう。文面にはっきりと現れないケースが大部分ではあるが、芸妓社会はその成分たる茶屋たちが、相撲社会はその成分たる部屋たちが、実業社会はその成分たる会社たちが、対立、競争、相克を営む舞台としてのイメージを持っていると考えてよからう。

外在性について。いずれの用例においても、《職業社会》をそう呼ぶのは、その《職業社会》に外在する者である。芸妓社会をそう呼ぶのは、その「内幕」をいかほどか予想しつつもその内容を具体的には知らない、この記事を投稿してきたらしき「土百姓」だ[781102]。相撲社会をそう呼ぶのは、その内情が「一向訳が分からぬ」「他の者」だ[890524]。学生社会をそう呼ぶのは、学生自身ではなく、学生たちの流行語を面白がって真似ようとする記者だ[090903]。複数の仲間が競争を営む《職業社会》を、好奇や憐憫や義憤を含んだ眼差しで眺めるこれら観衆は、《職業社会》内部における特殊な「功績」を「認むるもの少」ないという特徴を共通点とする人々として一括され、「世間」とも呼ばれている[870522]。

まとめれば、《職業社会》とは、それに外在する世間の人々から見て、複数の仲間が対立、競争を繰り広げつつ、独特な規範的価値を共有し、心的紐帯によって結び合っているかのように想像される集団である。

#### 4. 《階層社会》

出現回数、頻度ともに《職業社会》には遠く及ばないものの、上等社会と下等社会（また、同様に上流社会と下流社会、上層社会と下層社会、上級社会と下級社会、貴族社会と貧乏社会など）という階層的カテゴリーを指して社会と呼ぶ用例群も、明治全般を通じてコンスタントに出現する。これを《階層社会》と呼ぼう。

下等社会の欲張りが、いろはも満足に書けない娘を無茶苦茶に上等社会へおっ付けるのも考へもの…。

[780507]

花だ雪だと出るに車あり、寝るに権妻あり、日本料理も喰ひ飽きた、日本酒は健康の毒だと何不足なく楽まれたのは上等社会の風習にして、我々如き平民の夢にも見られない御全盛だ。

[780829]

年来我国在留の外教師は耶蘇教宣布の事に尽力して資金を費やしたる事少なからざれども、其成績は唯僅に下等社会の愚夫愚婦を教化するに止まり、…近日更に議を發し従前の方向を転じて、今度は日本の上流社会に向つて宣教の端を開き上の好む所を以て下を靡うすの方略を案じ…。 [840525]

近来我国上流社会の風として、動もすれば奢侈に流れ虚飾外見を是事とする者多き中に…奈良原繁氏の品行こそ紳士社会の模範として則るに足るべきなれ。 [890601]

《階層社会》は、《職業社会》と同型の想像力からスムーズに現れるものとして理解できる。各々の《階層社会》は、それらを包摂する〈日本社会〉の成分としては把握されておらず、《職業社会》と同様、一般的でなく特殊である。ただし〈日本社会〉に該当しそうなものが「我国」と呼ばれる傾向が《職業社会》の場合よりも若干強いとは言えるかも知れない[840525][890601]。これは上等社会と下等社会とのあいだに固着した対立的関係、つまり上等社会からする憐憫や軽蔑など、下等社会からする羨望や嫉妬などが想定され易いためだろう。ちょうど複数の仲間、党派の対立関係が、その対立の営まれる舞台としての《職業社会》を想像させたように、二大《階層社会》のあいだに想定される対立関係が、その対立が営まれる舞台の存在を想像させるのだろう。

《階層社会》もやはり《職業社会》と同様、単に便宜的なカテゴリー以上の意味を持つ。その内部で人々が規範的価値を共有しているかのように描かれている。下等社会を生きる「愚夫愚婦」[840525]は上等社会へと成り上がろうなどと「欲張」ってはならない[780507]はずであり、上等社会を生きる人々は「奢侈」「虚飾」[890601]を「何不足なく楽」しむ[780829]が、またその行き過ぎによる「飽き」や「毒」を抑制の努めなければならない[780829]はずである。

上等社会、下等社会をそう呼ぶのは、やはり《職業社会》と同様、そのカテゴリーに内在する当事者ではなく、「我々の如き平民」[780829]すなわち二大《階層社会》に外在し、それ自体社会として言及されることのない者である。このことと関連して注目しておくべきは、《階層社会》の用例群のなかで、上等と下等が社会としてコンスタントに言及されるのとは対照的に、この「平民」の層すなわち中等が社会として言及されることがほとんどないことである。中等社会が言及される稀少な用例においても、その圧倒的多数は「中等以上」[840511][840906][940612]、「中等社会以上」[930927]、「中等社会の上」[860710]というふうに、《下等社会以外》を指す表現になっており、中等自身が固有な規範的価値、心的紐帯を共有する集団として積極的に言及されることは、明治末に至るまで皆無なのである。

この特権的地位、他を社会と呼びながら、自ら社会と呼ばれることはないという地位が、二大《階層社会》に対する中等の視線を一種傲慢なものにしているのだろう。じっさいには下等社会と名指された人々のなかにも「愚夫愚婦」[840525]どころか高雅な精神の持ち主が居たろうし、上

等社会と名指された人々のなかにも「何不足なく楽」しむ[780829]どころか連日連夜の借金の取り立てに憔悴し切っていた者も居ただろうが、そうした生身の人々が生きる現実の多様性、複雑性に対する想像力はきわめて希薄である。

## 5. 《社会問題》

《社会問題》という成句は明治20年代半ばに出現し、以降コンスタントに用いられてゆく。その初出は明治24年の記事「日本に於ける労働問題」[910807]およびそれに端を発する連載「日本に於ける社会問題」(全5回。[910812]より[910816])である。ここで日本語語彙としての社会の、大規模な整理が行われている。《社会問題》において、それまでとは異なり《職業社会》と《階層社会》が明確に関係づけられ、また同時に〈日本社会〉が発見されている。<sup>9)</sup>

この連載において《社会問題》と呼ばれているのは、具体的には「財産なく、恒心なく、教育なく、勇気なく」、「終年終日營々として手足を休むるの余暇なく」「非命の最後を遂ぐるものある」「労働社会」[910807]と、「自活の道を失ひ、都会に流浪し来るもの頗る多」い「農業社会」[910815]を主成分とする下等社会の惨状である。つまり《階層社会》は《職業社会》を成分としている。そして二大《階層社会》のうち、下等社会の境遇が悪化することが、すなわち《社会問題》である。

しかし《社会問題》は単に下等社会の境遇が悪化することとイコールなのではない。それが例えば〈下等社会の問題〉などと呼ばれるのではなく、《社会問題》という新しい成句によって呼ばれることになったのには相応の理由がある。以前ならば、下等社会のこの惨状は、下等社会に固有な、中等以上の与り知らないところで生ずる苦悩として、せいぜい憐憫や同情を含んだ視線で眺められ描かれ、或いは救恤の対象となるだけだった。しかしこの連載においては明らかに違っている。下等社会の惨状は下等社会自身の性質に由来するのではなく、「産業の発達するに従ひ、…資本家と労力者の地位に於て著しき懸隔を生ずるに至り、富の分配をして益々不平等に赴かしむるの傾向」[910812]があることに由来するとされているのである。

つまり下等社会と上等社会のあいだに、一方の利得が他方の損失になるような、単に情緒的になく実利的に対立する構造的関係様式が、当事者たちの思いがどうであれ存在する。下等社会の惨状は、この構造的関係様式が急速な産業化とともに先鋭化することに由来するとされている。《社会問題》という新成句が必要になったのは、それが上等および中等とは無縁な下等社会の問題ではなく、二大《階層社会》の構造的関係様式としての、〈日本社会〉の問題だからなのである。

ゆえに次のように言われる。

斯の如きの状態〔下等社会の惨状〕は果して永く日本の社会に存すべき現象なるか、抑亦亦日本社会に於ける労働者の状態は久しく此の如くならざるべか [910807. [] 内引用者]

以前とは異なり、《職業社会》あるいは《階層社会》の総体は、単に国とか我国と呼ばれるのではない。それははっきりと〈日本社会〉と名指されている。社会の、特殊から一般への変化、〈日本社会〉の発見は、様々な特殊な《職業社会》を成分とする、特殊な二大《階層社会》のあいだの関係の、一般的な構造的様式の発見としてもたらされたのだった。

しかしこうして発見された〈日本社会〉は、《職業社会》や《階層社会》とは或る一点において性質の異なるものだ。そしてこの相違は些細なものではない。〈日本社会〉は、規範的価値を共有し、心的紐帯によって結束〈している〉のではない。結束〈していた〉のであり〈すべき〉なのである。つまりこの構造的関係様式が〈日本社会〉と呼ばれることができるのは、そこに規範的価値の共有、心的紐帯による結束が、今は不在だが、しかし、未来にはあり得ること、過去にはあったことが想像できるからである。すなわち「義心と俠氣に富めりと称せらるる日本人にして」下等社会の惨状を「見て、恬として之を顧みざるが如きものあるは何故ぞ、知て然るか將た知らずして然るか」[910807]。

二大《階層社会》の構造的関係様式が〈日本社会〉なのであれば、その内部を生きる人々は下等社会の惨状を、義侠心を以て顧みる〈べき〉ではあるまいか。産業化によって「情実的關係は一変して権利義務的關係となり、徳義的恩惠的關係もまた悉く法律的關係となる」[910812]。旧來、情意的に結束〈していた〉はずの〈日本社会〉は、産業化によってそうした性質を失ってしまった。〈日本社会〉において、社会の所在は時間的に差異化された。言い換えれば、〈日本社会〉は、その社会らしき一規範的価値の共有、心的紐帯による結束一の、現在における欠如として見出されたのである。

〈日本社会〉における社会の所在の時間的な差異化は、社会と、社会をそう呼ぶ者とのあいだの外在=内在関係をも大きく変えた。〈日本社会〉をそう呼ぶ者は、この連載のなかでは「在米高野房太郎氏」[910807]として、そして「世人」[910812]として特定されている。「在米高野房太郎氏」は以前と同様、社会を、社会に内在しない外部者の視点からイメージしているものと考えて大過なからう。しかし「世人」つまり世間の人々の場合、そうはいかないはずだ。

既に見たように、世間の人々が《職業社会》をそう呼ぶ時、彼らが一々の《職業社会》に外在していることは明らかだった。それに対して、この連載において彼らが〈日本社会〉をそう呼ぶ時、彼ら自身〈日本社会〉に内在してしまっているはずだ。にもかかわらずこの連載において、世間の

人々は深刻な混乱なしに〈日本社会〉をそう呼ぶことができているのである。なぜ彼らが〈日本社会〉をそう呼びつつ、そのなかに内在できているかと言えば、彼らが、自らと〈日本社会〉のあいだに、時間的に差異化された〈あるべき日本社会〉を媒介させているからである。つまり世間の人々は、自らを〈日本社会〉のなかに直接組み込んだのではなく、まず自らを〈あるべき日本社会〉という想像的な参照点と同定することによって、自らを〈日本社会〉のなかに位置づけることができたのである。

このことと関連してきわめて興味深いのは、同じ連載において「一国の元気たる中等社会」が「漸次跡を社会に絶たしめ」[910812]つつある存在として、上等社会か下等社会へ、特に下等社会へと吸収され消えゆく存在として言及されていることである。以前ならば、それ自体固有の内容を持つ社会として積極的に言及されることがなく、上等と下等を外部から眺め、それらを社会と呼び論評する特権的な立場にあった中等は、二大《階層社会》の構造的関係様式としての、現に存在する〈望ましからざる日本社会〉のなかの、下等社会へと吸収される運命にある。

これ以上の直接の言及がないため、仮説を提示することしかできないが、ここで中等はアイデンティティの問題に、他に先駆けて、鋭敏な仕方であらうことになったと言えるのではなからうか。不安な中等は、自らのアイデンティティの根拠となり得るなんらかの社会のイメージ、自分を含む人々から成る、独特な規範的価値を共有し、心的紐帯によって結束した集団のイメージを、《職業社会》でも《階層社会》でもない、第三の社会すなわち〈あるべき日本社会〉のイメージへと託すことになったのではなからうか。

内容空虚なまま消滅してゆく不安のなか、しかも自ら描いてきた下等社会のイメージに帰依することもできなかった中等が、現に存立している〈望ましからざる日本社会〉を触媒として〈あるべき日本社会〉を想像し、そこに自己同一化の帰着点を見いだそうとした結果、日本語語彙としての社会は外在の段階を脱し、内在化へとはっきりと方向付けられたのではなからうか。残念ながら中等社会と世間とのあいだの関係を描写した記事はない。ゆえに、これはあくまでも仮説の域を出ない。しかし社会という語の遍歴にこの段階の存在を仮定してみると、次節に考察する、その後の展開がたいへん理解しやすくなる。

まとめれば次のことである。第1に、特殊な社会の一般化は、二大《階層社会》の構造的関係様式としての〈日本社会〉の発見によってもたらされた。第2に、言及する者に外在していた社会を内在化してゆく傾向は、〈日本社会〉における規範的価値の共有と心的紐帯による結束の不在、その存在の時間的差異化、特に未来への遅延を契機とした。第3に、この過程のなかで、中等は自ら属するはずの中等社会に、内容的に充実した情意的な結束のイメージを託すことも、そのイメージに自ら帰依することもできなかった。未来へと繰り延べられた〈あるべき日本社会〉を肉づけてゆ

く必要を最も切実に感じていたのはおそらく彼ら中等である。

## 6. 《社会主義》と《社会政策》

《社会問題》の出現から約10年後、明治30年代半ば、《社会主義》の用例群が急激に出現回数を増し、明治40年代には急激に減少する。それに少し遅れて《社会政策》の用例群が、《社会主義》に比べれば遙かに緩やかにではあるが、同様の動きを見せる。

まず指摘すべきは、これらの成句における社会が、主部（主義、政策）を修飾する側に置かれていることである。《職業社会》と《階層社会》において、社会は修飾される主部の側に置かれていた。つまり社会のイメージは、他の語との組み合わせによって修飾され補強される必要があったのだ。それが今や《社会主義》と《社会政策》においては、補強される必要がないほどに確固としたイメージを持つものとして、逆に主義や政策の意味を補強する側に位置づけられているのである。

このことは前節に見た、《社会問題》において発見された二大《階層社会》の構造的関係様式としての〈望ましからざる日本社会〉というイメージが、一過性のものに終わらず定着したこと、及び〈あるべき日本社会〉、その実現のための道筋のイメージが、世間の人々のなかで、そして恐らく中等のなかで、この10年のあいだにかなりの程度に肉付けられたことを示唆していると言えるだろう。

《社会主義》と《社会政策》のあいだの関係は、前節に見た連載の時点つまり明治24年には、「労役者の不平の念…未だ破裂せざる今日に於て之を導かざるに於ては、共産党の起り急進社会党の現はるる蓋し自然の勢なりと謂はざるべからず」[910807]とされつつも、まだ

講壇社会主義と称するもの…其の多数の執る所によれば、国家は…貧弱者を救護するの責任ありと云ふにあり、…殊に学者社会に於ては最も勢力を有し、社会政策なるものは既に立派なる応用経済学中の一科となるに至れり。 [910813]

という程度の理解で済ませることができていた。《社会主義》は分配不平等の是正を、〈あるべき社会〉像の支柱とする。《社会政策》はそれを実現するための「応用経済学」である。講壇《社会主義》を理論的支柱とする《社会政策》は、「学者社会」という《職業社会》において認知され支持されている。

しかしそのちょうど10年後、明治34年には次のような記事が現れるのである。

数百名の諸氏に依り成立したる社会政策学会にては、動もすれば昨今其筋より禁止せられたる社会民主党なる者と同一物なるかの如く誤らるるを遺憾とし、更に一片の趣意書を發して禁止党との區別を明かにせり。 [010708]

社会政策学会と社会民主党とのあいだに、この記事が言うような埋めがたい亀裂がじっさいに生じていたとは思われない。社会政策学会は、官製大学を主要な拠点とする自らと、上流社会のなかの特に官吏社会および政事社会とのあいだの欠くべからざる関係に配慮して、このような声明を出したのだらう。しかしこの後、《社会主義》は「思ふに此主義〔社会主義〕…、日一日…随所に伝播せられつつあるは疑ふべからざるの事実也」[050110。〔〕内引用者]、「我邦の社会党は今猶ほ萌芽の中にあり、…其発達し行くも、枯凋衰残するも、彼等今後の行動如何に係るもの多かるべし」[060320]、「兎に角社会主義書を繙読せる教員に対して、峻激なる免黜処分を行はんとするもの…これ実に教育界の一危機にあらずして何ぞや」[070605]といった各種の同情論、擁護論を得つつも、明治43-44年の大逆事件を迎えることになった。

大逆事件の判決が出、社会政策学会が法案作成に大いに貢献した工場法が成立した明治44年、中等なるものが、ようやくそれ自体社会として、次のように描写されるに至る。

中下の社会に至つては、収入少きも相応の体面を保たざる可らざる上、一旦失職すれば容易に業務を見出し難く、…一家数口忽ちにして路頭に迷はざるを得ず。薄氷の上に眠れるにも似て不安なるは、実に中下の社会の生活状態なりとす。 [110517]

収入が減っても、中等としての「相応の体面」を守るために、支出を減らすことができない。彼らは下等社会への零落を甘んじて受け入れることができない。しかし中等らしい職というものは、下等のものとなる職に比して再就職が難しい。中等社会はそのような、「薄氷の上に眠れるにも似て不安」であることを特徴としている。

かくして、この中等社会に照準を合わせた統治上の施策の必要性が主張される。

今日の社会救済的設備の方針が…中等社会一中下の社会一の救済に思ひ至らざるの状あるを遺憾とせざる能はず、…従来例に依れば社会の不安分子は多く此階級より生ずるを以て、今少しく中等社会の生活を保障するの途に出づる事、蓋し急務中の急務たらずんばあらず。 [110517]

いつでも零落し得、下等社会以外のなにもものでもなくなり得る不安に曝される中等が、救済される



ことなく放置されているからこそ、彼らは現状に不満を抱き、〈あるべき日本社会〉を夢想し、それを夢想として終わらせることなく実現しようと欲する。不安な中等のこのような特徴を抑制する施策が必要である。中等の眠る薄水を支え、堅固なものとする役割を担うべく大きな期待がかけられたのは、もちろん《社会政策》だった。「社会組織の欠陥に乗じて起るべき人心の悪傾向を善所に転向せしむる…は、現在政府の専ら努むべき社会政策なり」[110607]。

## 7. 個人と社会

大逆事件を境に、《社会主義》—そしてその提供した〈あるべき日本社会〉のイメージは急速に退潮していった。それと共に、社会の用法からは際立った傾向が失われてゆく。大正時代に入ると、これまで本稿が扱ってきたいずれの用例類型も、15パーセントを下回る頻度でしか現れなくなるのである。そのなかで、本稿が日本語語彙としての終着点とした社会が現れる。「自分の本能を満足せしめる要求」[131117]を持つ個人<sup>6)</sup>とのあいだに矛盾・対立を繰り返しつつ、最終的な決裂にも最終的な合一にも至ることができない、「良心又は公共心と云ふが如」[131117]きものとしての社会である。この個人・社会問題において、社会は最終的な一般化と内在化を遂げる。

結論から先に言えば、ここに言われている個人とは、〈あるべき日本社会〉の代用品である。かつて中等或いは世間の人々が、他を社会と呼びつつ自らは社会と呼ばれることがない特権的な地位を手放し、社会への内在化を果たしてゆくことができたのは、〈あるべき日本社会〉、そこにおける未だ無い規範的価値の共有、心的紐帯による結束を想像的な参照点としてのことだった。この参照点を媒介したからこそ、彼らは今ここにある〈望ましからざる日本社会〉を、言わば不完全な〈あるべき日本社会〉として理解することができ、そのなかに自らを位置づけることができた。逆説的に聞こえるかも知れないが、いま、その参照点としての機能を肩代わりするのが、個人なのである。

大正2年に現れる次の記事が、それ以前とそれ以後とを接続している。

昨日までは認せしことが今日は直ちに非認せられ、今日愛好せらるる事が明日は掌を覆すが如くに憎悪せらるるを見るなり。蓋し都民は誰彼の別なく多少ヒステリー的傾向を有するものなり。…伝播せられたる感情を感受せざる…者は…『非社会的』の咎責を蒙るなり、而して…『非社会的』の罵詈は今日の都人士の場合にありては…痛切に羞恥を感じしむる力あるものとす。 [130218]

社会と、社会をそう呼ぶ者が、未来の〈あるべき日本社会〉における想像的な合一という参照点を媒介にして準=同一的な関係を築くという方策が破綻したとき、次に現れたのは、社会をそう呼

ぶ者が、常に一瞬遅れて、社会の持つ規範的価値への同調に失敗しては、「非社会的」との「咎責」、「罵詈」に曝されるという「ヒステリー的傾向」だった。つまり準=同一的だったはずの二者—社会と、社会をそう呼ぶ者—が、参照点の消失によって引き裂かれた結果、社会をそう呼ぶ者は、言わば（現にある望ましからざる日本社会の、しかも不完全な実現）という屈辱的な立場に置かれることになったのである。

ここに現れる個人とは、社会をそう呼ぶ者すなわち世間の人々或いは中等が、この屈辱的な立場から脱するために創設した新たな参照点だった。社会と、社会をそう呼ぶ者とのあいだに乖離があるということは、後者が前者に同調できないという否定的・受動的な事態ではなく、後者が個人として「濃厚強烈な活力」を以て「自分の本能」を満足させている[131117]という肯定的・能動的な事態である。そうであれば、今ここにある〈望ましからざる日本社会〉は、言わば不完全な個人として、社会をそう呼ぶ者とのあいだに準=同一的な関係を築くことができるはずだ。かくして、かつて〈あるべき日本社会〉が占めていた位置に、いまや個人が立つのである。

このような個人を想像的な参照点とすることによって、社会を社会と呼ぶ者は、もはや社会に対して「羞恥」[130218]せずに済むことになっただろう。ただしそれと引き替えに、彼らは社会とのあいだに終わりのない「煩悶」[131117]を抱え込むことになった。この点が、個人と、かつての〈あるべき日本社会〉との大きな違いである。

〈あるべき日本社会〉は、社会と、社会をそう呼ぶ者たちの、未来における最終的な合一を約束していたのだから、そこには羞恥も煩悶もなかった。あったのは期待であり希望だったろう。それに対して個人は、社会をそう呼ぶ者たちが、今ここにおいて、それぞれに抱懐している多様な諸欲求のイメージを核心とするゆえに、そのような合一を約束しない。しかも個人は、社会における規範的価値の共有、心的紐帯による結束の可能性さえも約束しない。つまり個人は自己を成就することもできないのである。なぜなら個人は、社会と、社会をそう呼ぶ者とのあいだに準=同一的な関係を回復するための参照点に他ならないからである。自己を成就すると、元来自ら因って来るところの所以を失ってしまうからである。

## 8. 結論

日本語語彙としての社会は、外部者から見て、規範的価値を共有し、心的紐帯によって結束しているかのように見えることを特徴とする《職業社会》および《階層社会》として出発した。それは、二大《階層社会》の構造的関係様式に由来する《社会問題》の発見を契機として、〈日本社会〉と呼ぶべき広がりを獲得した。その広がりにおいて、それまで社会を外部から社会と呼んでいた人々

は、《社会問題》が解決された〈あるべき日本社会〉の理想的イメージを拠り所として、社会への内在化を果たしていった。〈あるべき日本社会〉を肉付けた《社会主義》が失われゆく時、既に社会に内在していた人々は、次の拠り所を個人に求めた。ここに、個人とのあいだに対立・矛盾を抱えつつ、決裂することも合一することもなく、社会が形成されたのだった。

## [注]

- 1) この点、飯田泰三 (1997) と有馬学 (1999) という、突出した例外が存在する。飯田は、吉野作造における〈社会の発見〉(国家から区別された人間関係の総体としての社会の発見)を、ヘーゲルにおけるそれと比定しつつ鮮やかに描き出している。有馬は、大正期において「社会」という語が持たされた諸意味を整理しており、本稿の知見と呼応する点が多い。最近では市野川容孝 (2006) が、日本における社会民主主義の総括と展望を論じるにあたって、前二者を検討しつつ、若干の新しい知見を加えている。
- 2) 本稿が考察の素材として読売新聞社 (1999-2000) を選んだのは、まず、明治期の定期刊行物として、見出しのみならず本文にまで降りて徹底した検索をおこなうことができるデータベースが、現時点で、これしか存在しないという単純な事情がある。これに続く試みとしては、筆者が知る限り、朝日新聞社 (2001-) が昭和元年以降の紙面の電子化、出版を順次進めているのみである。石山洋 (1994-97) および内川・松島 (1983-86、1986-89) は収録書誌の広範さにおいてたいへん優れているが、それらの索引は残念ながら本研究にとって役立つものではなかった。
- 3) 以下、読売新聞社 (1999-2000) からの引用にあたっては、煩雑を避けるために特殊な略号を用いる。[860831]とは、1886 (明治19) 年8月31日を指す。なお引用にあたって、読者の便宜を図るために、旧字を新字に置き換え、振り仮名を削除するとともに、自由に句読点を追加した。
- 4) 表の作成にあたって、以下の処理を行った。イ) 日本社会には、「日本の社会」、「我が社会」、「此の社会」など類似の表現を含めた。ロ) 社会主義には、「無政府主義」、「共産主義」など類似の主義、および「社会党」、「社会民主党」、「共産党」など類似の政党名を含めた。ハ) 件数のカウントにあたっては、明治35年に「社会片影」というコーナーのタイトルとして現れる「社会」(125件)を除外した。ニ) 同一記事に、同じ範疇に入る文字列が複数存在する場合—例えば「社会主義」と「社会党」—、2件とせず1件としてカウントした。
- 5) 日本社会およびそれに類する表現はこの時突然出現したわけではない。これに先立つ用例が僅かながら存在する。

…独立自主の精神に乏しきは、我が日本社会の組立そのよろしきを得ず、慣習の久しき知らず識らず此の悪風を養ひ来たりしならん。  
[850210]

先頃中より日本の社会に現出したりし種々の問題を…分析する。  
[871124]

我日本社会の制裁如何を視るに決して嚴重なりといふを得ず。…余輩は日本社会が…嚴重なる且つ永久なる制裁を以てせんことを望まざるべからず。  
[890601]

しかしいづれの用例においても、〈日本社会〉と《職業社会》、《階層社会》のあいだの関係は明確に描写されていない。

- 6) 個人、或いは類似の語句と社会という語を関係づけた記事は、もちろん大正2年以前にも存在する。

凡根原なる者は、何れの事物にも付着せざるはなく、…一個人の集合体なる社会と雖も亦然らざるべからず。  
[860831]

社会今一步進みて、箇々人々に独立不羈の時代に達せば、妄りに他人の行状を倣ふこともなければ…。  
[880713]

社会が個人を没するの力大なるも、個人の勢力発達すれば、…社会は遂に個人を没却すべからず。  
[010624]

しかしいづれの用例も、個人なるものの質について明確な描写をおこなっていない。

## [文献]

- 秋元律郎、1979、『日本社会学史』早稲田大学出版部。
- 朝日新聞社、2001-、『朝日新聞戦前紙面データベース』朝日新聞社電子電波メディア局データベースセクション編、朝日新聞社。
- 有馬学、1999、『「国際化」の中の帝国日本』中央公論新社。
- 林恵海、1966、「邦訳社会論」、『東京女子大学付属比較文化研究紀要』12: 65-112。
- 市野川容孝、2006、『社会』岩波書店。
- 飯田泰三、1997、『批判精神の航跡 近代日本精神史の一稜線』ちくま書房。
- 石山洋他編、1994-97、『雑誌記事索引集成 明治・大正・昭和前期』全70巻、皓星社。
- 河村望、1973-75『日本社会学史研究』全2冊、人間の科学社。
- Loc keJohn., 1689=1967, Two Treatises of Government Peter Laslett(ed.), Cambridge University Press.
- Mil John Stuart., 1859=1975, On Liberty, David Spitz(ed.), Norton Press.
- 下出隼吉、1932、『下出隼吉遺稿』下出民義編、下出民義。
- 内川芳美・松島栄一監修、1983-1986、『明治ニュース事典』全8巻、毎日コミュニケーションズ。

内川芳美・松島栄一監修、1986-1989、『大正ニュース事典』全7巻、毎日コミュニケーションズ。

柳父章、1982、『翻訳語成立事情』岩波書店。

読売新聞社、1999-2000、『明治・大正の読売新聞』読売新聞社メディア企画局データベース部編、  
読売新聞社。